

課題名 富山地区におけるシャクヤク産地育成
「くすりのとやま」が咲かせる 切り花産地戦略
所属名 富山県富山農林振興センター担い手支援課

＜活動事例の要旨＞

富山地区（富山農林振興センター管内、図 1）において、生薬の原料として栽培されていた「シャクヤク」は、鳥獣被害が少なく、省力的に取組み可能な品目であることに着目し、高齢化した切り花産地を再建する契機となることを期待して、新たに「切り花シャクヤク」の生産振興および産地育成を図った。この結果、JA あおば花き出荷組合設立（平成 25 年）以降、集落営農組織を中心に導入推進したことで、栽培面積は約 5 倍に拡大（令和 6 年 250a）したほか、マーケットインによる出荷規格の見直しや新たな需要創出などの産地戦略を展開し、出荷量・販売額が拡大した（令和 7 年 14 万 7 千本・1,655 万円）。

さらに波及効果として、富山県内各地でシャクヤクが注目され、農作業サポーターの招致や切り花収穫体験を行うなど、都市農村交流により地域活性化の花を咲かせている。



図 1 富山県富山農林振興センターの位置

1 普及活動の課題・目標

（1）普及活動の背景

ア 「くすりのとやま」と薬用シャクヤク

富山県は、江戸時代から続く医薬品製造・販売のまちとして知られ、県くすり振興課の所轄する薬用植物指導センター（写真 1）では、生薬生産の技術確立・栽培指導を担うほか、約 250 種類の薬用・切り花兼用シャクヤク品種のなかから、生産者への種苗供給を行っており、5 月になると農家の庭先などでシャクヤクの花がいたるところで咲いているのが見られる。

富山農林振興センター企画振興課においては、中山間地域活性化・鳥獣害対策の一環として、薬用シャクヤクの産地体制構築支援による収穫機の共同利用、一元集出荷体制の整備や、省力多収栽培（写真 2）による「単収 3t モデル」実証など、薬用シャクヤクの安定生産を実現してきた。

イ 切り花産地の高齢化による規模縮小と花き生産組合の統合

富山市南東部に位置する JA あおば管内では、昭和 62 年に富山市公設地方卸売市場花き部の開設を契機に、管内において 4 つの花き生産組織を設置し、旧盆需要期向け小ギクを

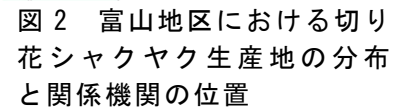


写真 1 薬用植物指導センター（右）のシャクヤク園（左）



写真 2 黒マルチ＋防草シートの敷設と養液追肥による省力多収栽培

切り花産地の活気を取り戻すため、平成 25 年、これらの組織を統合し、「JA あおば花き出荷組合」（以下、あおば花き組合）を設立した。JA あおば（図 2）では、花きを「基幹品目」の一つと位置づけ、花き（園芸）担当職員を配置して体制強化するとともに、新たな担い手確保のための省力品目の選定を行うこととした。



JA あおば管内は、農地の大部分を中山間地域が占めており、あおば花き組合の担い手を確保するためには、イノシシ等による鳥獣被害の少ない省力品目が望まれた。同管内において栽培されていた薬用シャクヤクは、機械操作や重量作業が少なく、高齢者や女性も取り組み易いことに着目し、一度植えると据え置き栽培が可能な「切り花シャクヤク」が有望であると考えた。JA あおば組合長とともに首都圏花き市場において需要動向の調査（トップアプローチ）で手ごたえを得て本格導入検討に入った。しかし、これまでの旧盆小ギクは地域内消費型品目であるのに対し、切り花シャクヤクは大消費地仕向け型品目であるため、大都市圏への流通を見据えた場合、生産ロットの確保が必須であった。

課題	取組事項	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
①市場ロット確保のための作付推進	・集落営農組織を中心とした作付け推進	あおば花き組合設立	JAと連携した作付け推進											
②新規生産者の早期技術習得支援	・省力栽培技術の確立と普及推進	防草シートの導入支援	省力技術確立				技術のマニュアル化							
	・栽培マニュアル作成による品質の高位平準化	栽培品種の切り前特性調査												
③市場ニーズに応じた産地戦略による有利販売の実現	・優良品種の選定および特性調査、導入支援	薬用植物指導センターでの特性調査						増殖体制構築支援						
		種苗メーカーや他産地からの種苗導入支援												
	・長期リレー出荷の実現	品種の早晚・標高差による作期分散						促成栽培試験ほ		簡易ハウス導入推進				
	・マーケットインによる販売戦略構築	市場との出荷検討会						母の日戦略(コロナ以降)		出荷検討会・出荷規格の見直し				

2 普及活動の内容

(1) 市場ロット確保のための「切り花シャクヤク」作付け推進

J Aあおば管内の集落営農組織では、ドローン防除や大型機械による作業を行う若い世代に交代が進みつつあり、これまで集落営農をけん引してきた高齢生産者や女性構成員の労働力の活用が期待されていた。

個別農家 17 名からスタートした花き出荷組合の新たな主要品目として「切り花シャクヤク」を推進していく中で、主穀作を中心とする集落営農組織へ導入提案することとし、JA 営農相談員と連携して①鳥獣被害が少ない点や、②水稻の作付け条件不利地（区画整備の困難な住宅付近・10 a に満たない変形田）などで小規模から作付出来る点、③売り先が確保されている点、④他の切り花品目に比べ労力がかからない点をポイントとして推進した。

(2) 新規生産者の早期技術習得支援

ア 切り花産地等のノウハウを生かした省力栽培の導入

シャクヤクは、植替えは不要だが雑草対策が大きな課題である。そこで、同管内において小ギクや薬用シャクヤク生産にも取り入れられている、黒マルチ+防草シート敷設により、栽培管理作業を省力化する体系とした。

イ 栽培マニュアルによる品質の高位平準化

組合設立当初は、切り花の生産経験のない新規生産者が半数以上を占めていた。

そこで、シャクヤク苗定植～切り花収穫開始まで 4 年かかる期間を準備期間として活用し、花き組合の収穫調製研修会に参加誘導するなどして、早期技術習得を図った。現在では、あおば花き組合員の 9 割が切り花シャクヤクを生産するに至っている。

切り花シャクヤクを市場出荷するにつれ「花が開かない」「花もちが悪い」などのクレームが寄せられるようになった。蕾が小さいうちに早期収穫すると開花しないことや、品種によって蕾の状態から花が開くまでの日数が異なることが分かり、切り前（収穫適期の蕾の状態）との開花日について、8 年かけて歴代 3 名の普及員が調査し（表 2）、JA 検査員や花き組合員との意見交換を重ね、品種特性や指で押したときの蕾の固さの感覚などの情報を基に、160 品種以上を 5 つのタイプに分類し、「切り花シャクヤク栽培マニュアル」にまとめた。これを研修会や目揃え会を通じて、個人農家・集落営農組織・農業法人など様々な生産規模のあおば花き組合員全てに周知することで、「どの品種もしっかり咲く、とやまのシャクヤク」として、品質の高位平準化を図った。

表 2 切り前段階別の出荷シミュレーションによる収穫適期の調査
(品種:「サラベルナール」、「絵姿」)

		水揚げ前	出荷時	蕾荷時	蕾荷1日後	蕾荷3日後	蕾荷5日後	蕾荷7日後	蕾荷9日後
		5月13日	5月13日	5月16日	5月17日	5月19日	5月21日	5月23日	5月25日
サラベルナール	緩め								
	固め								
絵姿	緩め								
	固め								

(3) 市場ニーズに対応した産地戦略による有利販売の実現

ア 品種戦略（少量多品種・専売品種、ラインアップ情報）

産地として推奨する品種の選定は、作付け推進初期は、薬用植物指導センターの保有品種を調査し、市場性の高い大輪品種（特品種）や、一般に市場流通していないが花型や花色の珍しい希少品種を中心に導入を推進した。近年は、種苗メーカーや他の切り花産地から、わき芽が少ないため栽培管理が省力的かつ、花色が珍しく大輪で芳香を有する、ボタンとの交配種を中心に品種を選定し、導入を図っている。

これまでに導入した品種は、計 178 品種に及び、花色・出荷時期・花の特徴などをまとめたデジタルカタログ（図 3）を作成し、各市場での相対取引やオンラインセリに活用できると、市場関係者から大変好評である。

イ 多品種＋標高差＋促成栽培による長期リレー出荷

同一ほ場での単一品種の収穫期間は 5 ～ 7 日程度で、最初の出荷から 2 セリ後にはその品種が手に入らない現状にあった。県内外市場と JA・県関係機関による出荷検討会において、市場関係者より、この出荷期間の短さが指摘された。

そこで、開花期の異なる極早生・早生・中生・晩生品種の組み合わせと、JA あおば管内の海拔 20 ～ 350m の標高差を生かした作付けを推進した。更に、簡易ハウス導入による無加温促成栽培を実証試験（国・中山間地域支援事業、写真 3）した結果、出荷期間が 2 週間以上前進することを明らかにした。これらの取組みにより、4 月下旬から 6 月上旬までの約 40 日間のリレー出荷を可能にした。

ウ マーケットインによる出荷規格の変更

出荷検討会を行う中で、新型コロナ以降の需要変化に対応し、切花長の最高階級を 80 cm から 70 cm に変更し、新たに 40 cm 規格を設けた。また階級は、どの市場にも仕向けやすい「cm 表記」を採用した。この変更により、購入者が求めやすいサイズになっただけでなく、生産者は 40 cm で切り花を収穫することで、下葉を株養成のために残すことが出来、株あたり収量が増加したほか、導入コストの高い希少品種を少量導入する場合でも、市場ロットの確保に貢献できるようになった。

3 普及活動の成果

(1) 切り花シャクヤクの生産拡大

JA 営農相談員と連携した作付け推進や省力栽培技術の推進、栽培初心者への切れ目ない指導の成果として、生産者数は、花き組合設立前（平成 24 年）の 17 戸から、令和 7 年は 52 戸・組織（うち集落営農組織は 12 組織）に拡大した。



図 3 市場の相対取引やオンラインセリにも活用されるデジタルカタログ



写真 3 切り花シャクヤクの簡易ハウス導入による無加温促成栽培

栽培技術や出荷方法のマニュアル化により品質が高位平準化されたことで、市場での販売単価は、77 円/本（平成 26 年）から 112 円/本（令和 7 年）に向上している。特に、30～40 代前半の若手生産者が自ら、新品種の導入やその特性の把握に意欲的に取り組み、有利販売に繋げている。

栽培面積は、組合設立当初の約 5 倍の 250a（令和 6 年）となり、令和 7 度の市場出荷本数は 14 万 7 千本、市場出荷額は、花き組合設立当初（平成 26 年）の 118 万円から約 1,655 万円に拡大した（図 4）。

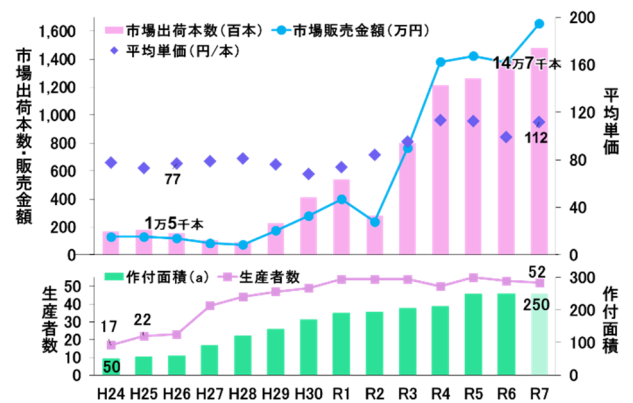


図 4 JA あおば花き出荷組合における切り花シャクヤク生産の推移（作付面積・市場出荷本数・市場販売金額・生産者数）

（２）有利販売による新たな需要創出

～母の日にシャクヤクはいかが？～

促成栽培ハウスの導入により、収穫期間が当初の 5 月上旬から、4 月下旬に前進したことで、花き業界では卒入学式に次いで市場規模の大きい「母の日」需要が見込めるようになった（写真 4）。このような新たな需要の創出、豊富な品種数、長期リレー出荷が産地の「強み」となり、小規模産地ながらも有利販売に繋げている。



写真 4 市場向けに作成した母の日の POP

（３）活動成果の波及

JA あおばの位置する富山市ではシャクヤクに対する作付け助成等が措置されており、作付け拡大を後押しするとともに、八尾町黒瀬谷では、切り花生産ほ場での切り花収穫体験を観光予約サイトで募り、都市農村交流を図るなど、シャクヤクを通じた中山間地域の活性化に取り組んでいる。

また、富山地区内の上市町においてはシャクヤクを「町の花」に位置付け、作付け助成を措置するとともに、都市部からの農作業サポーターを招致してシャクヤクを栽培する中山間地域協働のモデル地区（写真 5）としての横展開を農林振興センターも支援している。



写真 5 農作業サポーターによるシャクヤク定植

4 今後の普及活動に向けて

（１）更なる規模拡大に対応する集出荷 DX システムの導入

切り花シャクヤクの生産量拡大に伴い、集出荷作業において、生産者からの FAX による送り状と出荷検査後の等級情報を、JA 職員が手入力し、市場伝票作成する工程に時間を要し、市場の希望する時間に対応できない状況にある。この集出荷作業について、JA と出荷先市場間においてスムーズな情報連携を行うため、大消費地供給産地型の集出荷システムの導入実証（国・ジャパンフラワー強化プロジェクト推進・令和 6 年）を行った。

ボトルネックになっている出荷検査の状況を正確に把握し、産地や市場での問題点を地元 IT 企業へ橋渡しすることで作成した POS システムは、生産者が出荷情報の入ったバーコードシールを貼り付け、出荷検査時にハンディ端末でそれを読み取り、自動的に出荷伝票を作成する（写真 6）。

令和 7 年度から本格運用を開始したところ、日量 850 ケースを 2.4 時間で処理し、検査開始時間を早めることなく市場の希望する時間に、出荷情報を共有できるようになった。今後は、更に導入効果を高めるため、追跡調査を実施するとともに、ICT 活用に不慣れな高齢生産者に配慮した丁寧な支援を行っていききたい。



写真 6 ハンディ端末による
出荷検査

（２）種苗供給体制整備・簡易ハウス導入拡大による産地基盤強化

当産地の強みである多種多様な優良品種を産地内で増殖し、生産者へ速やかに種苗供給する体制を構築中である。また、作期分散効果や母の日需要期出荷が可能な簡易ハウスの導入拡大を図ることで、生産者の所得を向上させ、産地基盤強化による産地継続に助力したい。

富山地区において中山間地域の里山や庭先、あるいはとやまの薬箱の中で、長く親しまれてきたシャクヤクにより、切り花産地の再活性化を果たした背景には、生産者・JA・行政等関連機関が課題を共有し、同じ目標に向かって取り組んだ円滑な連携体制がある。今後も産地一丸となって取り組んでいきたい。

（執筆者 宮崎 美樹）